

(フロントランナー) リーダー育成塾「青山社中」筆頭代表・朝比奈一郎さん 志育てる現代の松下村塾

2015年6月27日03時30分



挑戦には「死への意識」が重要と言う。事務所に近く、多くの先人が眠る青山霊園で、自身も思索にふけることがある。書家に書いてもらった「青山社中」の看板は、いつもは事務所に掲げる＝東京都港区

■あさひないちろう（42歳）

次世代のリーダーを育む「現代の松下村塾」は、東京・青山の石材店の2階にある。座学で使う部屋には簡素な机と椅子、ホワイトボードだけ。「武士道というのは死ぬことと見つけたり」「明日死ぬと思って今日を生きているか」。講義でそんな箴言（しんげん）をマーカーで書きながら、何かに挑戦することの意義を穏やかに語った。「死を身近に感じたことは？」と問うと、塾生から「肉親が」「震災が」と声があがる。熟していく議論を、真剣に見つめる。

英語力が伸びる、MBAがとれる――。そんなノウハウは教えず、「志をもったリーダーを育てる」ことにこだわる。全講義を1人で担うのも特徴だ。パワーポイントなどのデジタル機器は使わず、寺子屋のような雰囲気も「魂に火をつけるには、この方が響くから」。カエサル、孫文、スティーブ・ジョブズら古今東西のリーダーたちの伝記や国家の盛衰をひもとき、大局観を養う。1年間の座学の後は人脈を紹介したり進路相談に乗ったりし4年かけて塾生のやりたいことを支援する。「現代は幕末と似て、組織が制度疲労を起こしている。常識や習慣を打ち破る『やり過ぎる人』を育てたいんです」

*

入塾条件は原則35歳以下。官僚、学生、教師、大手企業の社員、政治家秘書ら、これまで5期100人の塾生が門をたたいた。仕事や授業の傍ら塾に通った後、転職や留学で新地平をひらく人、仕事をしながら社会活動に関わる人もいる。鉄道会社を辞め、NPOの世界に飛び込んだ1期生の大山詠司さん（32）は塾をこう評する。「じわじわ燃える青い炎に包まれ議論をするうち、本当にしたいことが引き出された」

旧通商産業省での官僚生活は順調だった。アジア経済危機での特別円借款制度の創設など

を手がけた。だが、米ハーバード大院への留学で、転機を迎える。外から見た霞が関は非効率のかたまりだった。さらに、大学同期で財務省にいた親友が急死。人生のはかなさを痛感したことも改革意欲に火を付けた。

帰国後、各省庁の有志で「新しい霞ヶ関を創る若手の会（プロジェクトK）」を立ち上げ。改革案を実名で出版し、世に問うた。一部は公務員制度改革や民主党政権での国家戦略室の創設につながったが、「霞が関だけでなく日本をよくしたい」と思いが募った。2010年に退官。同年、青山社中設立へとなだれ込む。

*

塾生が育つことで、青山社中の活動も広がり続けている。NPOを設立して地域活性化に取り組みたいという塾生の発案に応え、自らも奮闘する。新潟県三条市の市街地活性化や栃木県那須塩原市の駅前開発、川崎市の中小企業振興条例案の作成。首長との折衝や条文の文言調整を手伝うのは、元官僚としてお手の物だ。

人材育成も地方を元気づけるのも、日本の活性化へ向けての一つのピースだ。「無駄も含めて、200も300も何かをして、ようやく100が得られる。地道に動くだけです」。意識するのは、吉田松陰。座しては待たない。

(文・木村尚貴 写真・関田航)

(b 3面に続く)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.